

Book Reviews

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shimizu, Tatemi, Naruhashi, Naohiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055430

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



新刊紹介

○ Hai-ning Qin : **A Taxonomic Revision of the Lardizabalaceae Cathaya** Vol. 7-8, 1-214, 1997, International Academic Publisher.

長年、アケビ科の研究に取り組んできた中国科学院香山植物園の覃海宁氏が、学位論文として完成していたアケビ科のモノグラフをこのほど印刷、出版した。私は著者とは10数年來の知己であり、まづもってお祝いを申し上げたい。

この本の構成は、材料と方法・研究史・形態・繁殖・*Parvatia* と *Holboellia* と *Stauntonia* の区別・属間関係と科内分類群・他科との類縁・植物地理・分類学的記述となっており、このような多角的な研究の結果、著者はアケビ科に4連2亜連9属35種を認めた。中でも、特筆すべきことは *Archakebia* (記載は1995年) の発見である。この新属はアケビ属やムベ属同様にアケビ連に属するが、花被片はムベ属と同じで6個2輪性、雄蕊はアケビ属と同じで花糸は離生し、心皮は3個で数はムベ属と同じだが形はアケビ属に似ており、果実はアケビ属のように割れるといったように両者の中間の形質を持つ。甘肅省から記載され、甘肅・陝西省に分布する。

アケビ科の最大の話題は、何と言っても東アジアと南アメリカに隔離した不思議な分布である。最近の分子系統学的研究からしても両者は単系統であることは間違いないが、その由来を説明することは難しい。著者はアケビ科の6個所の化石の記録——ドイツの漸新世の *Decaisnea*、カリフォルニアの上部白亜紀およびイギリスの始新世と漸新世の *Lardizabala*、パタゴニアの第三紀の *Lardizabalaxylon* など——を踏まえ、(1)アケビ科の起源の地は中国中・南部であろう、(2)祖先は白亜紀にローラシアと Gondwana 大陸が分離する前に両半球に広く分布していた、(3)第三紀後期から第四紀氷河期にかけて地球上の大部分で喪失したが、中国中・南部では氷河はなく、秦嶺山脈の隆起にも助けられて乾・冷の気候を免れ、残存し得た、(4)南アメリカの2属の祖先は中新世までに南アメリカに到達し、2属を分化したと説明している。アケビ科が古く三疊紀やジュラ紀に起源したという証拠さえ出れば説得力のある主張となるであろう。(清水建美)

○ Charkevicz, S. S. (ed.) : **Plantae Vasculares Orientis Extremi Sovietici** Vol. 8, 1-382, 1996, Nauka, Saint Petersburg.

このほど上記の本がロシア科学アカデミー極東支所(ウラヂオストック)から届いた。このシリーズは、表題が示すようにロシア極東地域の維管束植物をまとめたもので、1985年に第1巻が発行されて以来、12年をかけこの第8巻をもって完結した。全160科のうち第1巻だけは順番に1-4科のシダ植物に当てられたが、2巻からは収録された科の順番は不規則となり、この巻には最後まで残ったカバノキ科、ナデシコ科、バラ科、アワゴケ科、ハマウツボ科、オオバコ科、タヌキモ科、スギナモ科、キキョウ科、ラン科、ツユクサ科、ホシクサ科、ガマ科、サトイモ科、ウキクサ科の15科が収められている。

対象となった地域は、北は北極海から南はウラヂオストックまで、東はベーリング海から西はダウリアまでの北太平洋およびオホーツク海沿岸地域である。学名以外はロシア語で書かれているので厄介だが、属および種への検索表が示され、おもだった種類には分布図や植物図も付されて理解を助けてくれる。分布欄には基準標本産地も記されている。日本のフローラとの関連を調べるには書かせないシリーズである。蛇足ながら、第8巻の発行年は1996年となっているが、実際の完成は1997年である。(清水建美)

○ いがりまさし : **野草のおぼえ方(上)フィールドガイド18** B6判, 255頁, 1998年3月10日, 小学館, 1750円.

先に山と溪谷社から「日本のスマイル」を出した気鋭の植物写真家の著者が、今度は初心者向きのポケット写真図鑑を出版された。この本は、見開き2頁で1種を扱い、左頁上2/3に植物の全形、下1/3にアップの花の写真と解説、右頁の上に覚え方、下に近縁種の写真とその短い解説を入れるという構成になっている。実に発想が豊かで、神髄は覚え方の記事と写真にある。たとえば、センボンヤリは秋の頭花や果実期の様子が毛槍に似ているからだも毛槍の写真を配し、キンランでは金メダルにも匹敵するほどに貴重だからと長野五輪金メダルの写真を配するといった具合である。全篇を通し、いつの間に観察しいつの間にか写真を撮られたのだろうと感心させられる。優れた写真と記事には専門家でも勉強させられるし、初心者は楽しみながら利用できるおもしろい本である。(清水建美)

○ 門田裕一(監訳)手塚勲・小堀民恵(訳)デービット・アッテンボロー:植物の私生活 B5判320頁,1998年4月1日,山と溪谷社,3200円。

現在は大英博物館の理事でかつてはBBCにおいて数多くの自然史関連のドキュメンタリー番組を制作し、日本でもおなじみのアッテンボローの人気テレビ番組“The Private Life of Plants”のブック版(1995)、訳出されたのは日本が8番目という。

この本は「旅をする植物立ち」(Travelling)に始まり、「極限の世界を生き抜く植物たち」(Surviving)に終わる6章からなり、それぞれの章ではそのタイトルにふさわしい様々な植物を登場させ、その生きざまの不思議さ、巧みさを生き生きと見事な筆致で描き出している。その底には、植物は見ることも数えることも、コミュニケーションし合えることもできるのだと、人間の視点ではなく植物たちの視点で自然界をみるべしとする一貫した主張がある。ここには、おなじみのスマトラオオコニャクやハネフクベが登場するし、日本からは古代コブシが紹介され、どの話題もはげしく興味をそそってくれる。たとえば、セキショウモは、雌花が水面から沈む拍子にできた水面のくぼみに、漂う雄しべが落ち込んで受粉するといった細密な観察には思わずうならされた。この本によって、植物好きが大勢生まれることは間違いないだろう。

ただ、最初の話題の“植物の領土拡大戦略”ではフェスキューグラス *Festuca* が草本植物のなかで最も寿命が長く最も広い面積を占有する植物というのはオーバーな見方だし、最後の話題の“地球の生き物を支える「海の牧場」”でプランクトンの生産量が陸上を遙かにしのぐというのはかつてのIBPの折りに得た理解とは異なる記述である。随所に訳者註もあって理解を助けてくれるが、あえて言えば、キイチゴの果実は偽果というのは集合果とすべきだし、生長は成長とすべきであった。(清水建美)

○ 鶯谷いづみ:サクラソウの目一保全生態学とは何かー B6判229頁,1998年3月22日,地人書館,2000円。

出会いから15年、サクラソウ一筋にその生態の研究に打ち込んでこれ、著作を趣味とされる著者が、今度はサクラソウを中心に据えた保全生態学の入門書を出版された。

この本は、10章、各章5-10トピックスからなり、縦書き一般向きで文章もよく、話題の組立て方も優れており、とても読みやすくできている。一般にこの方面の研究は理論が先行し、現場での研究の裏付けが乏しい嫌いがあるが、ここでは他に追従を許さぬ豊富な実践的研究経験をベースとしているだけに分かりやすく、説得力があり、しかも多くの保全生態学への示唆や現状の自然管理に対する鋭い批判が披瀝され傾聴に値する。たとえば、開発計画地における絶滅危惧種の唯一の保全策が域外への移植であることへの危惧、野生生物の尊厳こそ守るべきとの主張、生物多様性は全地球的な環境変化のパロメーターであるとの見方、進化的一生態的固有倫理にもとづく生物多様性の価値認識、原生的自然の保護から生物多様性の保全への転換の主張などいちいち納得できる。著者も述べているように、生物集団には地域集団がありそれぞれに進化的生態的固有性を持っている。生物多様性の保全の研究は地域性に立脚したものでなければならない。今後の保全生物学の研究が大きく地域性の視点を組み入れた研究へと発展することを期待したい。

心の成長の糧である自然が人々の優しい母親であり続けるために、この種の本がどんどん出版され、広く読まれることを願っている。サクラソウのユートピアが一日も早く完成することを祈りながら。(清水建美)

○ F. Speta (verfass.) 1997. *Wurzeln—Einblicke in verborgene Welten*. *Stapfia* 50: 1-390.

昨年12月、オーストリアはリンツの国立博物館から生物学の総合学術雑誌 *Stapfia* Vol. 50 (根の特集号)が送られてきた。植物の根の世界は副題にあるように現在なお“知られざる世界”であり、最近ようやく根や地下器官の研究が盛んにおこなわれるようになってきたとあってよい。10年ほど前に国際根っこ学会 International Association of Root Research が発足したし、われわれも1995年に“日本草本植物根系図説”を上梓した。この巻は、論文集の形をとっており、編者の根の研究史の詳細な紹介に始まる11編の論文が収められている。論文のタイトルをみると、対象は木、草、シダ、内容は形態・生理・遺伝・生物学と多岐にわたり、それぞれに現代の根の研究の問題点を示してくれている。われわれも上記図説の補遺として1文を寄稿した。(清水建美)

○ 小泉武栄:山の自然学 文庫判,232頁,1998年1月20日,岩波書店,660円。

著者も書いているように誠にユニークな本である。山や動植物の案内書は巷にあふれるほどだが、この本は個々の現象を説明するのではなく、一貫して自然を全体として捉え、積極的に“なぜそうなのか”を考えさせ

てくれる本だからである。北海道から九州まで 25 山系をえらび、それぞれの山系に特徴的な現象を抽出し、そのよってきた理由を考えていくというのがこの本の流れである。たとえば、北アルプスでタカネヒカゲに出会う、なぜここにいるのかを考える。それは、礫地の一角に食草のイワスゲの一群があるからだ分かる。なぜここにイワスゲが生えているのかを考える。すると基盤の岩石に断層が見つかり、そのまわりでは岩石が破壊されて細かい岩屑が生産され、不安定な立地だが土壌もできてイワスゲの適地ができあがるからだといった具合である。ここに断層-イワスゲ-タカネヒカゲという全体的なみかたがうかがえる。自然愛好家にとって十分に知的好奇心を満足させてくれる好著である。(清水建美)

○ 李恩喆：韓国植物名考 (I) B5 判, (iii-xiii) +1-1688 頁, 韓国植物名考 (II) -附録- 1695-2383 頁, 1996 年, アカデミー書籍, ソウル, 全 2 巻, 345,000 ウオン, 原色韓国基準植物図鑑 B5 判, (III-XIII) +1-624 頁+plates 1-491, 1996 年, アカデミー書籍, ソウル, 150,000 ウオン.

この 3 部作は、現在最も信頼できる韓国の植物誌といえる。シダ植物、裸子植物、および被子植物について韓国の野生と栽培植物のすべてを取り扱っている。韓国植物名考 (I) では、各種につき、正名、異名とその由来；韓国名と別名；国内と国外の分布；ノート；生活型（休眠型、繁殖型、生育型）；染色体数（数とその出典）；スライド番号が記されている。(II) では、学名索引 pp. 1693-1946 と染色体情報に関する文献目録 pp. 1947-2383 が載っている。原色韓国基準植物図鑑の Plate は、押し葉標本のカラー写真で、スケールが入っている。植物の全体写真なので、細部が必要な植物に関しては不満が残る。本文には学名は付いているが、説明文は全て韓国語である。巻末には学名の索引あり。

著者の李恩喆氏は 1957 年成均館大学卒業、1993 年は江原大学自然科学部学部長を経て、現在は同大学の教授である。また、1984 年 8 月より 1985 年 7 月まで日本を訪れ、東大、京大、科博にて、8865 点の標本の写真をとっている。また、韓国のソウル大学をはじめ 6 大学で標本を調査している。

1979 年に郷文社より、李昌福の大韓植物図鑑が出版された。これは北陸館の牧野新日本植物図鑑の韓国判であった。上記 3 部作は内容の点で遥かにこの大韓植物図鑑の上に行くものであり、韓国植物分類学の水準の高さを示す。また、将来、朝鮮半島植物誌の完成のために、その確実な一歩となる本でもある。高価な本ではあるが、韓国植物を理解する上で、基本的かつ重要な文献であるといえる。(鳴橋直弘)

○ 李永魯：原色韓国植物図鑑 A4 判, 1-1237 頁, 写真 3637 枚, 1996 年, 教学社, ソウル, 180,000 ウオン.

著者はソウル大学生物学科卒、アメリカのカンサス州立大、エール大、スミソニアンで学び、東京大学理学部で理学博士をとり、1955-1965 年梨花女子大学で教壇に立ち、現在は韓国植物研究院（私設）院長である。また、著者は韓国植物学会会長、韓国植物分類学会会長、韓国ラン協会会長を歴任した。

この本は、写真による韓国の裸子植物と被子植物の植物図鑑である。3637 の分類群につき、韓国名、学名、日本名、韓国語の解説文があり、植物によっては、開花時期、結実時期、および用途が記されている。韓国語は読めないのに、記載文については何も言うことはできないが、写真はやや大きく、良く撮れており、印刷技術も良く、見ていて楽しい本である。特に、日本の植物を良く知る読者には、日本の植物との比較が出来てよいだろう。日本にも平凡社の写真植物図鑑（木本 I, II；草本 I, II, III）があるが、韓国ではこれ一冊で全てわかる点でうれしい。ただ、写真を基本とするとき、どうしても同定ミスができるのは仕方がないことだが、この本でもそれが見られた。(鳴橋直弘)

○ 広島大学理学部附属宮島自然植物実験所・比婆科学教育振興会（編）：広島県植物誌 B5 判, 1-832 頁, カラー写真, 図, イラスト, 白黒写真有り, 1997 年 11 月 25 日, 中国新聞社, 16,000 円.

県単位の基本的な植物誌である。本書は、植物相と植生、植物研究史、植物目録（種子植物 pp. 77-566；シダ植物 pp. 567-612；コケ植物 pp. 613-655；地衣植物 pp. 657-692；淡水藻類 pp. 693-751）、地名、天然記念物、自然公園と自然環境保全地域、維管束植物文献目録からなっている。分類群ごとに、学名、和名、生育地のノート（無いものもある）、文献、産地と標本が記載されている。希に分布図と線画がある。巻頭部にある pp. 1-32 のカラー写真にはいくつかの見事なものがあり、目を楽しませてくれる。

各植物の形態的記載は日本植物誌に譲ったのか、ここでは無い。これも紙面が限られていることから、一つの生き方かもしれない。多くの植物にあるノートは面白く、また価値がある。これまで、広島県にはいわゆる「県植物誌」はなかった。この本は十分にその役割を果たすものといえる。今後はさらなる内容の充実を期待

したい。

(鳴橋直弘)

○長野県植物誌編纂委員会(編)・清水建美(監修):長野県植物誌 A4判, (iii-xx)+1-1735頁, 付図3, 1997年12月25日, 信濃毎日新聞社, 23,000円。

本書は, 自然環境, 植物研究史, 植物相(藻類 pp. 127-142; 蘚苔植物門 pp. 143-160; シダ植物門 pp. 161-266; 裸子植物門 pp. 267-288; 被子植物門 pp. 289-1502; 補遺; 新植物名一覧; 粘菌類; 植物誌とコンピュータ), 植物地理からなる。

和名, 学名(基準標本の産地), 短い記載(染色体数有り), 産地と標本, 分布について, 分類群ごとに記載されている。綱から種や変種への検索表が有る。属ごとに1種の花や果実の線画がある。また, 県内産の3分の1の種については県内の分布図が載っている。

植物分類学の先進県である長野県が出しただけのことはあって, よく出来た本である。県の面積は広く, また高い山もあり, 調査には苦勞されたことと想像する。執筆者も名の知れた人が多く, 42人にも達している。検索表によって, 科を当て, 属を当て, 種を当てることが出来る。属毎にある花や果実の線画はすばらしく, 利用価値の高いものである。しかし, 各植物の記載は, もう少し長くしてほしかったし, 県単位の地方植物誌には, 基準標本や染色体数の情報よりは, 芽ぶく時期, 花期, 果実期, 落葉期などや, サイズや色などの形質変異の県内の詳細な情報がほしかった。植物研究史の前半部分は, 長野県の人物に限らず, 長野県に生育する植物についての研究史であるため, 長野県以外の人にとっても有益な情報となっている。この本はかなりの大冊であり, 読者や利用者のことを考え三分冊にしてたら良かったのではないかと, 友人の一人から聞いた。私も同感である。

(鳴橋直弘)

○久志博信・内藤登喜夫(編):日本の山野草 ポケット事典 B6判, 1-468頁, 1998年3月25日, 日本放送出版協会, 2,800円。

著者の一人, 内藤登喜夫氏は古くより本学会の会員である。彼は, 「ゆきわりそう」, 「京都府下の山野草」, 「京都の野草図鑑」などの著者として活躍されてきたが, 今回友人の久志博信氏と山野草のポケット事典を出版された。

日本で, 山野草として栽培されている国内産, および国外産の植物約1600分類群を対象に, 植物のカラー写真と和名, 学名, 科/属, 生態, 分布, 自生環境, 草丈, 花径, 開花期, 変種・変異種, コメントの項目立てで, 植物毎に簡潔に書かれている。貴重な植物については, 植物版レッドリストに従い絶滅危惧種の区分で, 写真の角に記されている。

この本の特徴は, なんととっても栽培方法の解説であり, 一部記述のないものもあるにはあるが, 各植物毎に簡単な記号で表記されている点である。スイバ, シシウド, ヌスビトハギなど, こんな植物も栽培されているのか, と驚かされることもあるが, 大半の植物は山草家好みのかわいい草本植物である。チングルマ, キクザキイチゲ, ドクダミの八重咲きなどのびっくりさせられるものや, 外国産の珍しいものも多く見られ, 楽しい本である。写真は素晴らしいものと, 今一つ物足りないものがある。また, 残念ながら, 写真が小さいのは, この種の本としては仕方がないことだろう。近年日本の野生植物の写真は, 他の多くの図鑑でも見ることができるので, オオハンゴンソウ, コナスビ, カントウタンポポなど, 一般に山草として栽培されないものは省いて, その分, 鉢でよく栽培されているものの写真が大きくなれば, 良かったかもしれない。

(鳴橋直弘)